芥川竜之介『西方の人』注解（六）

R. Akutagawa's "SAIHO NO HITO" EXPlanolory Notes (Ⅵ)

吉田孝次郎
中野恵海

35 復活

③ルナンはクリストの復活を見たのをマグダレナのマリアの想像力の為にした。想像力の為に、――しかし彼女の想像力に飛躍を与へたものはクリストである。彼女の子供を失つた母は度たび彼の復活を――彼の何かに生まれ変つたのを見てゐる。彼は或は大名になつたり、或は池の上の鴨になつたり、或は又蓮華になつたりした。けれどもクリストはマリアの外にも死後の彼自身を示してゐる。この事実はクリストを愛した人々のどの位多かつたかを現すものであらう。彼は三日の後に復活した。が、肉体を失つた彼の世界中を動かすには更に長い年月を必要とした。その為に最も力のあつたのはクリストの天才を全身に感じたジヤアナリストのパウロである。クリストを十字架にかけた彼等は何世紀かの流れ去るのにつれ、シエクスピアの復活を認めるやうにクリストの復活を認め出した。が、死後のクリストも流転を閲したことは確かである。あらゆるものを支配する流行はやはりクリストも支配して行つた。クララの愛したクリストはパスカルの尊んだクリストではない。が、クリストの復活した後、犬たちの彼を偶像とすることは、――その又クリストの名のもとに横暴を振ふことは変らなかつた。クリストの後に生れたクリストたちの彼の敵になつたのはこの為である。しかし彼等も同じやうにダマスカスへ向ふ途の上に必ず彼等の敵の中に聖霊を見ずにはゐられなかつた。

「サウロよ、サウロよ、何の為にわたしを苦しめるのか？　棘のある鞭を蹴ることは決して手易いものではない。」

我々は唯茫々とした人生の中に佇んでゐる。我々に平和を与へるものは眠りの外にある訣はない。あらゆる自然主義者は外科医のやうに残酷にこの事実を解剖してゐる。しかし聖霊の子供たちはいつもかう

云ふ人生の上に何か美しいものを残して行った。何か「永遠に超えようとするもの」を。

（注）

①復活　Resurrection　ユダヤ教・キリスト教などで、人間がその死後、再び生命を回復するとの信仰。一旦死んだものが蘇生して新生活を始めること。イエスの復活は「マタイ伝」第二十八章・一―二十。「マコ伝」第十六章・一―二十。「ルカ伝」第二十四章・一―五十三。「ヨハネ伝」第二十章・一―三十一、第二十一章・二十三。「使徒行伝」第一章・三―十一。第二章・二十四。等。

②ルナン　エルネスト Ernest Renan（一八二三―九二）フランスの思想家、言語学者、宗教史家。テーヌと並び称されたフランス実証主義の思想家。同時代の文学者に科学的精神と自由思想の点で影響を与えた。彼が実証主義の歴史家、文献学者として、聖書の誤謬、伝説、歴史的矛盾を批判しつつ、キリスト教を人間的事実として歴史的角度から探求した成果は、大著「キリスト教起源史」（全八巻）（六三―八三）に結実したが、この第一巻「イエス伝」（六三）はイエスを教義的解釈から解放して、これに科学的解釈を加えたものとして国の内外に異常な反響を呼び起こした。

③想像力の……ルナンの「イエス伝」第二十六章には「誰が、彼の体を運び去ったのか。いつも軽信な熱狂的精神は、復活に対する信仰の打ち樹てられるところの数々の物語の全体を、如何なる状態において、孵化せしめたのか。このことは、反対する史料がないから、永久に分らないであらう。が、しかし我々はかう言はう、そのをり、マグダラのマリアの強い想像力が、主役を演じた、と。愛の崇高な能力！幻想におそはれた女の愛情が、復活した神を世界に与へるその聖い瞬間！」とある。

④パウロ　Paul; Paulos（ギリシャ）サウロ又はポーロともいう。キリスト教をローマ帝国に普及するのに最も功の多かった伝道者。もと熱心なユダヤ教信者でキリスト教徒を迫害したが、復活せるキリストに接したと信じて回心し、生涯を伝道に献げ、六十四年頃ローマで殉教。「異邦人の使徒」といわれた。彼の書翰十二通は新約聖書の重要な一部。

⑤流転　ながれうつること。うつりかわること。仏教語としては生死因果の絶えず輪転してきわまりないこと。輪廻。

⑥クララ　Clara Assisiesis（一一九四―一二五三）クララ修道女会といわれるカトリック修道会の創立者。後年聖者の列に加えられた。

⑦パスカル　Blaise Pascal（一六二三―六二）フランスの哲学者・数学者・物理学者。人間は「考える葦」で、物心を超越した愛の世界をあこがれ、この愛の世界は、神の恩寵を通じて人間に表現されると説いた。有名な「パンセ」Pensées は死後、およそ一千に近い断片的な草稿がいわば無秩序のまま発見され、後研究者の手によって現在の形にととのえられたものである。

⑧犬たち　「31・クリストよりもバラバを」の章に出て来る「犬」の用語と同様、俗物達の意であろう。

⑨彼　俗物たちがかつぎ出した偶像的キリスト。

⑩彼等　クリストの後に生まれたクリストたち。

⑪ダマスカス　シリアの都で、クリスト教の中心地。パウロはクリスト教徒を迫害しようとしてダマスカスへ向かう途中復活したキリストの姿に出会い回心した。

⑫彼等の敵　クリストたちにとっての、偶像的キリスト。

⑬サウロよ、サウロよ……　サウロはパウロのこと。「使徒行伝」第九章・三―五又同じく第二十六章・十四に「…サウロサウロ何ぞ我を窘る乎なんぢ刺ある鞭を蹴ること難し…」とある。

（解）

ルナンはマグダレナのマリアがクリストの復活を見たのを彼女の想像力の所為にした。彼女の想像力のせいに――とは云っても彼女の想像力に〔こういう〕飛躍を与えたものはクリストである。〔真実に愛する者に死なれた人がその死者の復活を見るというのは有り得ることである。愛する〕わが子に死なれた母はたびたびその復活を――彼が何かに生まれ変わったのを見ている。あるいは大名になったり、あるいは池の上の鴨になったり、あるいはまた蓮華になったりしている。けれどもクリストはマリアのほかの人々にも死後の彼自身の姿を現わしている。この事実はクリストを愛した人々がいかに多かったかを示すものであろう。彼は〔処刑の〕三日の後に〔早くも〕復活した。

が、肉体を失った彼〔の精神〕が世界中〔の人々の心〕を動かすにはさらに長い年月を要した。そのために最も有力だったのはクリストの天才を全身に感じたジャアナリスト、パウロ〔の情熱〕である。クリストを十字架にかけ〔てその肉体を葬り去っ〕た彼ら〔世間〕は何世紀かを経るにつれ、〔一たんその存在価値が忘れられた〕シェクスピアの復活を認めるようにクリストの〔精神的〕復活を認めだした。が、死後のクリストも〔時世とともに〕幾変遷を経過したことは確かである。一切のものを支配せずにはいない流行〔なるもの〕はやはりクリスト〔のイメージ〕をも支配していった。クララが愛した〔十三世紀の〕クリストとパスカルが尊んだ〔十七世紀の〕クリストとは同じでない。が、しかしクリスト復活後、凡俗たちがクリストを形の固定した本尊（迷信的な対象物）として祭り上げることは――彼らがまたクリストをかつぎ出して横暴をふるうことは変わらなかった。クリストの死後に生まれたクリスト的天才たちが俗物たちがかつぐクリストの敵になったのはこのためである。しかしそのクリストたちも〔その一人サウロがダマスカスへクリスト教迫害に向かう途上で復活したクリストの次の言葉を聞いたと同じように〕必らず敵の中に復活したクリスト（聖霊）に会わずにはいられなかった。

「サウロよ、サウロよ、何のためにわたしを苦しめるのか？　棘のある鞭を蹴ることはけっしてたやすいものではない。（それは自分自身を傷つけることになろう）」

我々はただ〔心身ともに〕朦朧疲労の〔そして涯しなく、とりとめなくひろがった、索莫たる〕人生の中に立ちつくし、途方にくれてい

る。〔だから〕我々に平和を与えるものは〔空しい〕眠りのほかにあるわけはない。あらゆる自然主義者（現実現象の観察分析のみを事とする者）は外科医のようにむごたらしいまでにこの事実を分解し調べあげている。しかし聖霊の子供たち（クリストたち）はいつもこういう〔俗悪な、幻滅のみの〕人生の上に何か美しいものを残していった。何か「永遠に超えようとするもの（現実に妥協せず、絶えず一心に自己の真実を貫こうとする生の姿勢（デーモン））」を。

（要旨）

クリストの復活をマグダレナのマリアの想像力に帰したルナンの説をさらに進めて、彼女をしてそのように想像力を発揮させたのは彼女のクリストへの深い愛の力であるとし、死者の復活を見ることは愛する子に死なれた母などに珍しいことではないが、クリストの場合、マリア以外の多くにもその姿を見せているのだからクリストがいかに多くの人々から愛されたかを知るべきだとし、クリストの復活を彼への愛に基づく想像力のたまものと規定した上で、肉体的には死んだクリストが、その天才を感銘したパウロらによって「精神」において生命を得たとする。かくて復活したクリストも時世により、信者により、そのありように流転はあったが、俗物たちがクリストを偶像化しクリストの名のもとに横暴をふるうことは変らず、このためクリストの後に生まれたクリスト的天才たちが俗物のかつぐ偶像化されたクリストを敵としたのであるが、そのために彼らはいずれも真のクリストにめぐりあうことになったのである。すなわち真実の生き方を希求するクリスト的天才たちは、俗物に祭り上げられたクリストに敵対することで復活した真のクリストに接したのである、とする。現実のどこにも「茫々とした人生」をしか見出せない芥川は、クリストの復活を如上のようにうけとり、「事実」の「解剖」のみを事とする「自然主義」的生き方を否定し、クリストの真価が「永遠に超えんとする」生き方にあり、これこそが現代の我々におけるクリストの人生意義であり、復活であることを主張している。

36　クリストの一生

勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は実にそこに存してゐる。彼の後に生まれたクリストたちの一人（ひとり）、――ゲエテは①「徐（おもむ）ろに老いるよりもさつさと地獄へ行きたい」と願つたりした。が、徐ろに老いて行つた上、②ストリンドベリイの言つたやうに晩年には神秘主義者になつたりした。聖霊はこの詩人の中（うち）にマリアと吊（つ）り合（あ）ひを取つて住まつてゐる。彼の「大いなる異教徒」の名は必（かならず）しも当つてゐないことはない。彼は実に人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。況や他のクリストたちよりも大きかつたことは勿論である。③彼の誕生を知らせる星はクリストの誕生を知らせる星よりも円（まる）まるとかがやいてゐたことであらう。しかし我々のゲエテを愛するのはマリアの子供だつた為ではない。マリアの子供

たちは麦畠の中や長椅子の上にも充ち満ちてゐる。いや、兵営や工場や監獄の中にも多いことであらう。我々のゲエテを愛するのは唯聖霊の子供だつた為である。我々は我々の一生の中にいつかクリストと一しよにゐるであらう。ゲエテも亦彼の詩の中に度たびクリストの④髯を抜いてゐる。クリストの一生は見じめだつた。が、彼の後に生まれた聖霊の子供たちの一生を象徴してゐた。（ゲエテさへも実はこの例に洩れない。）クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず変化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは⑤天上から地上へ登る為に無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中にに傾いたまゝ。……

（注）

①徐ろに老いるより……　「ファウスト」第一部のファウストの独白に「地獄も悪魔もこわくない。そのかわり、わしはいっさいの喜びを奪い去られた。……こんなふうにして、これ以上生きることは、犬だってごめんだろう」とある。

②ストリンドベリイの言つたやうに……　ストリンドベリイの「ダマスクへ」第三部・第四幕「僧院の礼拝堂」の場で、神父メルヒュルのことばに、「（ゲーテは）後にはゲルマニア主義を征服して古典ふうにはいった。……そこには伝統的な神々の安静と調和というようなものが自分自身との最大な不調和になっています。……『偉大な異教徒』がファウストを第二部で改宗させて、マリアと天使によって救わせることで終わるのは、ふつうゲーテの観賞者から等閑にされています。『玻璃のように澄んだ人』が生命の終わり近くには、すべての物を、前には彼が見透かしていた最も簡単な事実さえ、あんなに『特殊』に、あんなに『珍しく』思いはじめたという事実も、等閑にされています……」とある。

③彼の誕生を知らせる星は……　『詩と真実』第一章に「一七四九年八月二十八日、正午の十二時を告げる鐘の音とともに、わたくしはフランクフルト・アム・マインに呱々の声をあげた。まことに幸運なる星のもとに。太陽は処女宮にたち、その日の最高所に達していた。木星と金星とは和順のまなざしで、水星とても抗いの色なく、それぞれの太陽をながめていた。……このめでたい星位は、あとになって占星家たちがわたくしの運命判断を大吉とうらなってくれたものであるが……」とある。が、芥川のこの章の文章は、聖書にあるクリストの誕生を告げる星の記録（7・博士たち参照）を念頭に置いてのゲーテ観を述べる訳で、「詩と真実」の記事とは無関係と考えた方がよい。

④髯　を抜いて……世間に云う「鼻毛を抜く」（他人のすきをうかがって出し抜くの意）とか「鼻毛を読まれる」（甘く見られる、見くびられる）とかではなくて、親近の情を寄せる程の意であろう。

⑤天上から地上へ登る　……芥川の誤記説が圧倒的に多い。事実、初出本文も処々に明らな誤記のある事ではあるが、原稿と、「改造」の初出の本文とをこのまま尊重して解するならば、クリストの一生は、彼の神としたところの詩的正義をこの現実の地上に生

かそうとしたものであるところから、天上より地上へという表現にしたものと考えられる。

（解）

勿論、クリストの一生はあらゆる天才の一生のように情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖霊〔の血〕の支配を受けていた。彼が十字架上に最期をとげたという悲劇は実に聖霊に支配されていたことにある。彼の後に生まれたクリスト的天才たちの一人、――ゲエテは「徐々に老いて行くよりもさっさと地獄へでも〔悪魔の所へでも〕行ってしまいたい」と〔「ファウスト」の中で〕願ったりした。が、徐々に老いていったうえ、ストリンドベリイの言ったように晩年には〔現実を逃避する独りよがりの〕神秘論者になったりした。聖霊はこの詩人の中でマリア的〔事なかれ主義的〕生き方とつり合いを保っているのだ。〔ストリンドベリイが彼につけた〕「大いなる異教徒」の名は〔この故に〕必ずしも当たっていないことはない。彼は実にこの世を調和的に生きて行く上ではクリストよりもずっと大物だった。まして他のクリストたちよりも大物だったことは勿論である。〔だから、さだめし〕彼の誕生を知らせる星はクリストのそれを知らせる星よりもまる〳〵と肥え太って輝いていたことと思われる。しかし我々がゲエテを愛するのは彼が〔現実生活本位の〕マリアの血を引いているからではない。マリアの子供（精神価値の低劣な者）は麦畠の中や長椅子の上にも〔いたる所に〕充満している。いや兵営や工場や刑務所の中にも多いことであろう。我々がゲエテを愛するのはただ彼が聖霊の子供だったためである。我々は一生のうちにいつかクリストと共感、共鳴することであろう。ゲエテもまたその詩の中で、たびたびクリストに親近している。クリストの一生はみじめだった。が、〔それは〕彼の後に生まれた聖霊の子供たちの一生を〔も〕象徴していた。（ゲエテさえも実はこの例外ではない。）クリスト教はあるいは滅びるであろう。少なくとも絶えず変化している。けれどもクリストの一生はいつも我々を感動させるであろう。それは天上から地上へいたりつくために無残にも折れた梯子である。〔しかも〕薄暗い空からたたきつける土砂降りの雨の中に傾いたまま。……〔非情な現実というほかはない。〕

（要旨）

一生を情熱を燃やし続けて生き、十字架の悲劇に生涯を閉じたクリストは、世俗的調和に生きた母マリアよりも父の血聖霊の支配を受けていたというべきである。ゲエテはクリストたちの一人であったには違いないが、聖霊的なるものとマリア的なるものとは彼の中でバランスがとれていた点で、彼を「大いなる異教徒」とする考え方も分かる。この二つを人生の要素と単に考える限り、ゲエテはこの二要素を豊かに、且つ調和させていたのだから、そういう意味での「人生の上」ではクリストよりもずっと大きかったと言える。しかし、マリア的なものは精神価値の低い場所にみちみちていることを考えなくてはならない。我々がゲエテを愛するのは聖霊の子供だった為だけである。我々は一生の中にいつかはどうしてもクリスト、即ちクリストの中の聖霊

と一体化するであろう。ゲエテもその詩（詩こそデーモン的結晶）の中でたびたびクリストに親近し礼讃している。クリストの一生はみじめであり、それは又ゲエテをも含めて彼の後の聖霊の子供たちの一生を象徴している。クリスト教は絶えず変化しているし、或は滅びるかも知れない。しかしそれと関係なくクリストの生き方はいつも我々を感動させるであろう。彼の一生は神＝詩的正義を、この地上での生き方にもち来たらす（グウルモンの「神こそ我々の造つたもの」《「20・エホバ」》説をうべない、クリスト最後、最大の問題が「いかに生くべきか」《25・天に近い山の上の問答」》にあったとする芥川は「登る」という語によって、生きている人間の尊重を示したと考えられる。）為に無残にも折れた梯子である。神の君臨する天上（「20・エホバ」）の薄暗い空からたたきつける土砂降りの雨の中にその梯子が傾いたままとは痛ましい限りである。と、同時に人間の生き方にこれ以上に価値あるどういう生き方が考えられるだろうか。前35章で「ただ茫々とした人生の中にたたずんでいる」自分を痛感している芥川にとっては、たといいかに痛烈な挫折に終わろうと、絶対への内的欲求に情熱を燃し続けた生き方――絶対の彼岸を目指し「永遠に超えんとする」精神に生きることだけが生き甲斐であり、「わたしのクリスト」の最大の意味であった。

37 ① 東方の人

ニイチェは宗教を「②衛生学」と呼んだ。それは宗教ばかりではない。道徳や経済も「衛生学」である。それ等は我々におのづから死ぬまで健康を保たせるであらう。「東方の人」はこの「衛生学」を大抵③涅槃の上に立てようとした。④老子は時々⑤無何有の郷に佛陀と挨拶をかはせてゐる。しかし我々は皮膚の色のやうにはつきりと東西を分つてゐない。クリストの、――或はクリストたちの一生の我々を動かすのはこの為である。「⑥古来英雄の士、悉く山阿に帰す」の歌はいつも我々に伝はりつづけた。が、⑦「天国は近づけり」の声もやはり我々を立たせずにはゐない。老子は⑧そこに年少の⑨孔子と、――或は支那のクリストと⑩問答してゐる。野蛮な人生はクリストたちをいつも多少は苦しませるであらう。太平の艸木となることを願つた「東方の人」たちもこの例に洩れない。クリストは⑪「狐は穴あり。空の鳥は巣あり。然れども人の子は枕する所なし」と言つた。彼の言葉は恐らくは彼自身も意識しなかつた、恐しい事実を孕んでゐる。我々は狐や鳥になる外は容易に墻の見つかるものではない。

（昭和二・七・十）

（注）

①東方の人　佛陀・老子・孔子など、東洋の聖人たちを指すものであろう。

②衛生学　ニーチェの「この人を見よ」（第一章）に「…怨恨は病

人にとっては禁物そのもの、彼の悪だ。残念ながらまた彼の何より自然な性向だ。この事があの深い生理学者仏陀にはわかっていた。彼の宗教はクリスト教のようなあわれむべきものと混同されないようにむしろ、衛生学と呼ぶほうが至当であろうが、その効果を怨恨に対する勝利に置いた。霊魂を怨恨から脱却せしめる——それが快癒への第一歩である。」とある。

③涅槃　梵語 nirvana 滅・寂滅の意。衆苦を断じて得た解脱の境地。

④老子　周代の哲学者。道家の祖。

⑤無何有の郷　何もないところの地、すなわち、無為の仙境をいう。

⑥古来英雄の士……　出典未詳。「山阿」は、山の曲がり入った所、山のくま。

⑦天国は近づけり　「マタイ伝」第三章、一・二に「当時バプテスマのヨハネ来りてユダヤの野に宣伝へて曰けるは天国は近けり悔改めよ」同、四章、十七に「斯時よりイエス始て道を宣伝へ天国は近けり悔改めよと曰たまへり」第十章、七に「往て天国近きに在と宣伝よ」とある。

⑧そこに　人は、無為諦観的人生観に生きるべきか、積極的人生観に生きるべきかの問題。

⑨孔子　中国春秋時代の学者・思想家。儒教の祖。

⑩問答　「荘子」外篇「天運」第十四に孔子と老子の問答がある。

⑪狐は穴あり……　「マタイ伝」第八章・二十に「イエス之に曰けるは狐は穴あり天空の鳥は巣あり然ど人の子は枕する所なし」とある。

（解）

ニイチェは宗教を「衛生学」と呼んだ。それは宗教ばかりがそうなのではない。道徳や経済も〔ある意では〕「衛生学」である。〔なぜならば〕それらはいずれも我々に自然に死ぬまで健康を保たる〔上で役立つ〕であろう〔からである〕。「東方の人（聖賢）」はこの「衛生学」〔宗教〕をたいてい涅槃（煩悩解説の境地）の上に立てようとした。〔すなわち〕老子（老聃）はときどき無何有の郷（荘周の考えた自然無作為の楽土）で仏陀と交わりを確かめ合っている。〔すなわち老・荘・佛は共通の地盤を持っている。〕しかし我々（東洋人）には皮膚の色の違いに依るようには、はっきりと東西の区別がつけ得る訳ではない。クリストの——或はクリストたちの一生が我々を動かすのはこのためである。〔すなわち〕「古来英雄の士、ことごとく山阿に帰す」の〔諦観的な〕歌はいつも我々（東洋人）の心に伝えられて来た。が、〔一方〕「天国は近づけり」という〔人間に生きる希望を与える、クリストの積極的な叫びもまた我々を奮い立たせずにはいない〔からである〕。〔実際〕老子は〔無為諦観的人生観に生きるべきか、積極的人生観に生きるべきかの〕問題で年少の孔子と、——あるいは中国のクリストとも云うべき者と問答している。〔これは重大な問題である。〕野蛮な現世はクリストたちをいつも多少は苦しませるであろう。これは〔「古来英雄の士、ことごとく山阿に」と観じ〕太平の草木となることを願った「東方の人」たちも例外ではない。クリ

ストは「狐は穴あり。空の鳥は巣あり。しかれども人の子は枕する所なし」と言った。彼の〔この〕言葉はおそらく彼自身も気づかなかった恐ろしい事実を含んでいる。我々は〔真に人間らしく生きる心を捨てて〕狐や鳥〔などの動物〕になるほかは容易に塒（安息所）を見つけることはできないのである。

（要旨）

宗教、それは何であろうか。ニイチェは宗教を「衛生学」と呼んだが、我々を自然に死に到るまで健康を保たせるのに役立つ意味では道徳も経済学も同じ様なものである。東方の聖賢たちはそれを大低欲望と作為との否定の中に求めている。老・荘・佛はこの傾向に於てお互いに似通ったものがある。しかしそうだからといって、東洋人は、西洋人の積極性に対して、消極性だと言い切れるものでもない。諦観的人生観は長く東洋人たる我々に受けつがれて来たが、クリストの「天国は近づけり」の絶対的積極的理想の世界追求の声にも我々は奮い立たされるのである。また事実、無作為を説く老子と問答した孔子は仁義絶対の積極的情熱に燃えていたのであるから、中国には孔子というクリストたちの一人がいたとも云えるであろう。それにしてもこの人生は野蛮であるから、いつも聖霊の子供たちを苦しませずにはおかないだろう。太平の自然に帰することを願った東洋の聖賢もその例外ではなく、この野蛮な人生に悩ませられたからである。クリストは「狐は穴あり云々」といったが、我々は人間として生きることをやめないかぎり真に心休まる所がないのである。人間が人間としての価値を積極的に発揮して生きて行けない人生であることを、東方の聖賢の生き方と教えとの諦観的態度からと、我々を奮い立たせずにはおかないクリストの言動の底に秘められている「恐ろしい事実」とから、鋭く深く観じ、人生は野蛮なものという絶望感を決定的にして、芥川は「西方の人」の正篇をしめくくっている。